

脳と心の対話

玉川大学グローバルCOE特別講義

脳科学の時代に「心」をどう知るか……… 第

6

回講義

哲学者

野矢茂樹

NOYASHIGEKI



「心」の意味・「他者」の意味

赤いリンゴがひとつあるとしましょう。見た人はみな「これは赤いリンゴだ」とは言いますが、リンゴが好きな人と嫌いな人では、同じリンゴでも見え方が違っているはずですね。ここでさらに、「じゃあ、〈リンゴは赤い〉」と言っても、私の感じる赤色と、他の人が感じる赤色は同じなのだろうか?」「同じか違うか、どの言葉で確かめればいいんだろう」などと、どんどん考え出すと、自分以外の**他者の心**の状態について知ることなんてできっこないという、がんじがらめの懷疑にはまりこんでしまいます。

でも、その考えは、知覚や感覚だけを中心に論じているのではないのでしょうか。私、あなた、彼……それぞれがもつ感情や思考によって意味を与えられ、変化していくものが「心」だと考えてみると、**心の領域**はもっと広がっていきます。

のや・しげき

東京大学大学院総合文化研究科教授。1954年東京生まれ。東京大学大学院博士課程を修了後、北海道大学助教授を経て現職。著書に『心と他者』（勁草書房）『哲学の謎』『無限論の教室』（講談社現代新書）『哲学・航海日誌』（春秋社）『はじめて考えるときのように』（PHP文庫）『論理トレーニング』（産業図書）『論理哲学論考を読む』（ちくま学芸文庫）『ここにはないもの』（大和書房）『入門！ 論理学』（中公新書）『大森荘蔵』（講談社）ほか。



心は各人に秘められた 内なる世界などではない

なんとなくみなさんそうお考えになつていらっしゃるんじゃないですか？「心は一人一人に秘められた内なる世界だ」つて。そんな常識的な考え方を「内界モデル」と呼びましょう。内界に対する「外界」は、この世界です。その外界に例えば一個のリンゴがある。そのリンゴの姿を十人十色に各人の心の中に捉える。つまり、知覚する。でも、内界モデルは根本的な困難を引き起こします。

第一に、**外界問題**。私が知覚し体験しているのはすべて内界ですから、私はどうやって外界のあり方を知ることができるのか、それが分からなくなる。

第二に、**他我問題**。他人の内界、他人の心の中を私は知覚することも体験することもできませんから、他人の心をどう理解すればいいのか、分からなくなる。

この二つの問題を巡って哲学はさまざまな議論を展開してきました。しかし、この問題は解決不可能だと思うのです。そこで、一足飛びに、もう内界モデルとは手を切ることにしてしましよう。じゃあ、どう考えればいいのか。それが今日の話です。

「主観的／客観的」という言葉の意味を考えるとところから始めてみましょう。内界モデルでは、まさに内界が主観的で外界が客観的と

されます。しかし、もうその考え方はとりません。では、どう考えるか。

**主観的か客観的かは
実践のあり方に基づいている**

一匹の犬に対して、ある人が「この犬はケガをしている」と言い、別の人が「していない」と言ったとします。この意見の不一致は、このままでは収まりません。これは一致させなければいけない、一致への圧力がかかる不安定な不一致、つまり「客観的」と言われることがらに関わる意見の不一致です。

それに対して、「この犬はかわいいね」と「かわくないよ」という不一致は、一致を求められない、不一致のままに安定しうる意見の不一致、「主観的」なことです。

どういう意見の不一致が、一致を求める不安定な不一致なのか、それとも不一致のまま安定するものなのか、それはわれわれの実践とコミュニケーションのあり方に応じたものとなります。逆に言えば、実践とコミュニケーションのあり方が変われば、何が主観的で何が客観的とされるのかも変わります。うのです。大雑把に言つて、一致させておかないと一緒に何かをするときに困る、そういうことがらが一致を求められる。それに対して共同実践を形成するときに影響力をもたないようなことがらは不一致のままに、「あなたはあなた私は私」で安定させられる。

一致への圧力を受ける
ものが「世界」であり、
その世界に収まりきらずに
「君はそうか、僕はこうだ」
と不一致のまま安定する
ものが「心」なんです。



私は、こうして不一致のままに安定するものが「主観的」と呼ばれ、「心」と呼ばれるものの中に収められるのだと言いたいのです。逆に、一致の圧力を受けるものが「客観的」と呼ばれ、世界を形成していく。そして世界に入らなかつたものが、すべて「心」として括られるわけです。

知覚の眺望論

―視点位置と世界の眺め―

私の考え方の基本は、不一致のままに安定しうる意見の不一致をとりあげ、それがどのような仕掛けで不一致のままに安定しうるのか、われわれのコミュニケーションと実践のあり方を観察する、というものです。まず、知覚について見ていきましょう。

例えば、二人で歩いていて、私が先に曲がり角を曲がる。すると探していた家が見える。私は、「赤い屋根の家が見えるよ」と言う。後ろの人にはそれはまだ見えない。ここには不一致がありますが、この不一致は不一致のままに安定します。なぜでしょうか。

ここに傷があつて私は痛みを感じている。彼は痛くない。それは一目瞭然、ここにケガがあるかどうかの違いです。

ここでも従来の他我問題では、人称性が決定的なものとなります。しかし、私はいまのあつさりした答えで済ませたい。人称性なんか感覚報告の不一致がそのまま安定する仕掛けには関係がないと言いたい。知覚の場合には視点位置を出しましたが、感覚の場合には身体状態です。ある人に痛みがあり、別の人にはない。そういう感覚の不一致があるときにはわれわれは必ずその二人の間に身体状態の違いがあるはずだと考える。逆に言えば、例えばこんな傷があつたら誰でも痛いと考ええる。私とかあなたといった人称性は効いてこなくて、「誰でも」という構造がある。

知覚の現われと感覚の現われを合わせて世界の「眺望」と呼ぶことにします。教室が見えて、みなさんの姿が見えて、腰もちょっと痛かつたりして、そんな現われが、いまの私の眺望です。「私の」というのは、「私が立っている視点位置と私の身体状態からの」という意味で、人称性に訴えたいわけではありません。その点は注意してください。

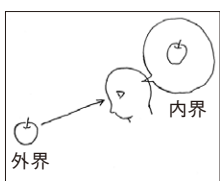
そこで、眺望についての知覚と感覚の議論をまとめれば、眺望は視点位置と身体状態によつて定まるので、その関数になります。

眺望 = f (視点位置, 身体状態)

*4 視点位置に言及したい
「早くおいでよ。ここから海が見えるよ」といった発言が、視点位置に言及する典型的な発言である。他にも、「よく聞かえないからもっと近くに行こつ」といった発言も、視点位置に言及するものである。

*5 物理的な記述
「机の上にリンゴがある」「や」そのリンゴは真っ赤に熟している」のように、物のあり方を記述する場合、それは物理的な記述である。また、数式を用いた物理学の記述も、もちろん物理的な記述である。

*2 外界問題
目の前にリンゴがある。内界モデルに従つてそれはリンゴの知覚像であり、外界にあるリンゴの素物ではない。しかし、そうだとすると素物のリンゴは絶対に知れないものになってしまう。



*1 内界モデル
リンゴから光が反射されて目に入り、視神経を経て脳を興奮させ、その結果リンゴの知覚が得られる。この常識的な考え方は、まさに内界モデルである。

*3 他我問題
心をもつた他人を自我に対して「他我」と呼ぶ。内界モデルに従つて、他人の心のあり方が分からないだけでなく、そもそも他人が心をもっているのかどうかさえ分からないものとなる。

*6 関数
この場合は、視点位置と身体状態のあり方が決まれば、それに応じて眺望のあり方も一通りに決まる。ということを開関と表現した。f は関数を表す記号である。

答えは簡単で、見ている位置が違うからですね。そして私はこのあつさりした答えで片づけてしまいたい。ところが、これで片づけるということは、内界モデルに未練のある人にはたいへん難しいことなんです。

内界モデルに立つ人は、見ているものが違うのは、私が私でありあなたがあなただからだ、と言います。この、私とあなたの違いを「人称性の違い」と呼びましょう。内界モデルは、知覚の不一致は人称性の違いによつて安定すると考える。だけど、知覚の不一致を安定させる仕掛けの中に人称性は関係がない。そう言いたいんです。ここに立つて、この方向を見れば、誰でもこれが見える。この「誰でも」という構造があるだろう。そこには私もあなたもない、と言いたいのです。

見る位置、これを「視点位置」と呼ぶことにします。この用語は、「視」という字を使いましたが、知覚一般に適用されるものとしてます。どこから聞くか。何を舌の上に乗せるか。どこを触るか。そして、何に鼻を近づけるか。対象と認識主体がどういう位置関係にあるか。それを視点位置と呼びます。そして、知覚の異なりが安定しうるのは、その不一致が視点位置の異なりに言及されることによつて解消されるからだ。そう主張したい。

「見える」とか「聞こえる」のような言い方で知覚の報告を行なうのは、視点位置に言及したいからです。どこから見ているのかに関

心がないのなら、ただ「赤い屋根の家がある」とだけ言えばいい。知覚の報告というのは、世界のあり方を、その視点位置に言及しつつ、報告したものなのです。

このような視点位置への言及は、知覚報告を物理的な記述とは異なつたものとしてます。物理的な記述は、物理学がそうですが、無視点的です。どこから見られたものなのかには関心がありません。しかし、視点位置というのは対象と主体の位置関係ですから、知覚報告の中には非物理的なものは何ひとつ含まれていません。知覚報告は、その人の意識内容(内界)の報告ではないのです。

**感覚の眺望論
―身体状態と感覚―**

私が自分の経験を報告すると、その中には知覚したものごとだけではなく、そのときに私が感じているさまざまな感覚も含まれています。そこで私は、例えば「頭痛がする」と報告します。ところが他人は「私はしない」と言う。この不一致は、ふだんは不一致とさえ自覚されないぐらい、あたりまえの不一致です。では、感覚経験の報告はどうしてこんなに簡単に不一致のまま安定するのか。これも答えは簡単で、身体の状態が違うからです。頭痛を引き起こす身体の状態というのはそんなににつきりしてないのかもしれませんが、ケガなんかの場合はつきりしてますね。こ



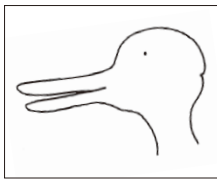
脳と心

脳科学の時代に〈心〉をどう知るか

の対話

*7 不変項
「机の上に茶碗がある」という事実は、どこから見ようとも、どんな視力の人が見ようとも、つまりどんな視点位置や身体状態であれ、一定に保たれる眺望の要素だと言える。それを不変項と呼んだ。

*8 あひる・うさぎの図形



そして、身体状態を固定して、視点位置だけの関数として捉えられた眺望が知覚であり、視点位置を固定して、身体状態だけの関数として捉えられた眺望が感覚であると定義したい。さらに言えば、物理的な無視点的記述は視点位置と身体状態をさまざまに変化させても同一に留まる不変項^{*}だと言いたい。しかし、こうした話を展開する余裕はもうありませんので、これは聞き流してください。

相貌論

— 意味の発散における心 —

知覚と感覚を視点位置と身体状態との関係で捉えるという話をしてきたわけですが、この過程では積極的に人称性は無関係として切り捨ててきました。これは従来の他我問題から脱け出すという試みでもあったわけですが、心という領域が人称性と無関係ということはありえないでしょう。私が私であるからこそ、あるいはあなたがあなたであるからこそ、そういうものとして安定的に認められるしかない、そのような不一致こそ、むしろ

人間の感情の多様さには
すべてその人の来歴が
関わっている。

それこそが知覚や感覚のような
「誰でも」の構造を
見出せない「心の領域」です。



る知覚や感覚よりも「心」の名のもとに捉えられるにふさわしいように思えます。

そこで、感情について考えてみましょう。例えば、私にとって愛着のある茶碗が割れてしまったときに、私はそれを悲しみます。でも、他の人はとくに悲しまないでしょう。しかも、それは視点位置と身体状態の関数ではない。その感情のあり方の違いを、違う場所から見ただけだからだとか、身体の状態が違うからだとは言わないわけです。

ここで、反転図形について考えてみます。感情と反転図形はつながっていると思うのです。例えば、あひる・うさぎの図形と呼ばれるものがあります。これを反転図形と知らない二人が、一方は「あひるだ」と言い、他方は「うさぎだ」と言ったとしましょう。私はそれが反転図形だと知っている。そのとき私は、この二人の見え方の違いを、違う場所から見ているからだとか、身体状態が違うからだと言明したりはしません。だとすれば、ここで言われる「あひるに見える」とか「うさぎに見える」というのは、私が定義した意味での「眺望」ではないことになります。そこで私はそれを「相貌」と呼びます。

相貌の違いというのは、その二人がその図形に与えている意味づけの違いです。一方はあひるとして意味づけ、もう一方はうさぎとして意味づける。反転図形というのは、その図形のもつ意味があひるからうさぎへと反転

という意味づけをする人としては、ぜんぜん違う悲しみになる。その点を捉えて、感情の場合には「理由」と呼びたいのです。

ひと口に「悲しみ」といっても、理由が親の死である場合、友人に裏切られた場合、失恋の場合、さらには初めての失恋の場合と二〇回目の失恋の場合、等々において、千差万別の異なる悲しみが訪れます。一般に、人間の感情の圧倒的な多様さに比して、感情を現わす語彙は乏しいように思われますが、むしろ感情はあまりに多様なので、とりあえず「悲しみ」とか「喜び」とかどんぶり勘定で言っているのだと考えています。

ですから、「なぜ胃が痛いのか」と「なぜ悲しいのか」の「なぜ」はぜんぜん違うわけです。繰り返せば、感覚の場合には身体状態そのものが原因で、それがどのように意味づけられるかは関係がない。他方、感情の場合には、そのものごとくその人がどういう意味を与えているかによって、異なる理由が与えられることになります。

このことは、複数の人が同じできごとに接したときに、そこから引き起こされる感情が必ずしも一致しないということを、反転図形の場合のような仕方でも説明することを可能にします。例えば、ある試合の結果を前にして、ある人たちは喜び、ある人たちは悲しむ。あるいは、同じ「親の死」と記述されるできごと

とを前にしても、そこに与える意味づけによって、異なる悲しみを覚える。こうしたことは、あひる・うさぎの反転図形における不一致と同じだと言いたいのです。世界は反転図形である、そう言ってもいいでしょう。

机の上の何気ない茶碗に対してさえ、私の私にとつての意味は、私とその茶碗を手に入れてからこれまでのすべての来歴が関わっています。さらには、私がどういう親から生まれ、どういう育てられ方をしてきたのか等々の、私の半生がすべて関わっていると言ふべきでしょう。そうして私は、いまこの茶碗に私だけの感情を抱く。ここに、知覚や感覚のような「誰でも」の構造を見出すことは、難しいのではないのでしょうか。

私は、心に関わる局面を眺望と相貌という二つの側面から捉えてきました。そこで、知覚と感覚という眺望の場合を、「パースペクティブの構造」と呼び、それに対して、感情のような相貌が関わる場合を、「アスペクト的構造」と呼びたいと思っています。

アスペクト的構造に関わる「心」の領域は、感情を越えてさらなる広がりを見せます。思考や意図などもまた、アスペクト的構造をもっています。こうしてアスペクト的構造のもとに現われる「意味の他者」こそが、かつて知覚や感覚を中心に論じられていた他我問題に代わる、新たな他者の問題の場面であると私は考えているのです。

する、意味反転の現象なのです。

感情もやはり意味に関わります。そのことを見てとるため、「なぜ」という問いを考えたい。二つの「なぜ」を比較します。一つは、例えば「なぜ胃が痛むのか」という問い。もう一つは、「なぜ悲しいのか」という問い。痛みの場合には、その原因を尋ねています。答えは、胃炎だとか胃潰瘍といったものになるでしょう。他方、悲しみの場合には、与えられる答えのあり方が決定的に違うのです。その違いを捉えるために、悲しみの場合には「原因」ではなく、原因と対比した意味で、「理由」と呼ぶことにします。

例えば、その悲しみがその人の親の死によるものであったとしましょう。そのとき、そのできごとが「その人の親の死」と記述されること、そういう意味をもつことが本質的となります。それに対して、胃の痛みの場合、胃潰瘍が原因であったとして、それが「胃潰瘍」と記述されることは本質的ではありません。どのように記述されようと、胃がある状態であることが胃痛の原因とされます。しかし、感情は違います。感情はあるできごとそのものによって引き起こされるのではなく、そのできごとがもつ意味によって引き起こされるのです。例えば親が死んだことが悲しみを引き起こしたとしても、それを「親孝行できなかったな」という意味づけをする人と、「たいした遺産も残してもらえなかったな」

講義を終えて

玉川大学グローバルCOE拠点リーダー・坂上雅道教授

人文科学と脳科学、心を知るためには両方からのアプローチが必要だ



今回の講義は「脳科学の時代に心をどう知るか」というテーマに直接関連してくる、非常に興味深いお話でした。

私たちが脳科学者は、心に関する諸概念は、いずれはすべて脳に関する諸概念に置き換えられる、と考えていますが、野矢先生は、「そうだったとしても、人間の悲しみや痛みは消え去ることとはなく、心に関する諸概念も決して消えることはないだろう」とおっしゃいます。

今のところ、私の側からはそれについて否定も肯定もできないのです。というのも、コミュニケーションと実践のあり方の中で心を考える哲学と、脳の電気信号として心を説明しようとする脳科学では、スタンスに大きな違いがありますから。しかし、人文科学と脳科学が融合できる点を探っていくことは、新たな学問の普遍性を追究することだと思えます。

「心とは何か」を探っていくためには、出会える糸口が多ければ多いほうがいいと、私は考えています。